

研究所たより 研究所たより

昨年の今頃を振り返ると、中十条の事務所を引き払い、赤羽への引越が済んだばかりで、バタバタしていたことを思い出しますが、前の引越で1t近いゴミを捨てたのですが、この1年でまた元に戻ってしまったようです。事務局の藤井さんが退職し、そのまま慌しく『協同の発見』の編集に追われて、他の事に気が回らなくなりつつあります。

さて、新年度の会費の請求書を送付させていただきます。お振込みをよろしくお願いたします。もし、手違い等がありましたら、お知らせください。

個人的な活動ではありますが、4月2日(土)に「足元の戦争#フリーター・ニート問題を撃つ!」というイベントを開催しました。今年2月に「テロリストは誰? / 九条の会」という団体を立ち上げ、20代、30代の人間が個人の立場で戦争と平和について考えようということで、その定例会として行ったものです。2月のこの欄でも書いたNHKスペシャル「フリーター漂流~モノづくりの現場で」のビデオを見た後、様々な立場の人から発言をしてもらおうという内容でした。このイベントには当研究所の理事、文化学習協同ネットワークの佐藤洋作さんも参加していただいてニート支援の立場からご発言をいただいたり、フリーターの支援している労働組合の方からアルバイトの現職復帰のため8年間争議を行い、最高裁まで闘って勝利した話などをしていただいたりして、全部で40人ほどの参加がありました。

「フリーター漂流」は今や日本の製造業を支えている(違法)請負会社から派遣されたフリーターの若者たちの希望のない働き方に焦点をあてた内容で、政治の介入に唯々諾々と従うイメージのNHKにも、鋭く時代を捉えるテレビマンが居ることを示す秀逸なドキュメンタリーです。イベントでは、元引きこもりだったという青年が、このビデオを見た感想として「また引きこもりたくなりました」と発言し、また、ある若者からは「こういう働き方は特に珍しくない」との発言もありました。フリーターの労働者としての権利を守るということと、労働者協同組合のような自ら仕事を起こす取り組みについても議論が交わされました。

バブル経済の頃に発生したフリーターは、様々なしがらみに縛られず、自分の都合に合わせて働き、辞めなくなったらいつでも辞められる、それまでの終身雇用の働き方とは違う「新しい働き方」でした。私も学生時代に「フリーターでも食っていけるのではないか?」とボンヤリ思っていたことを思い出します。しかし、90年代を経て、いつの間にか多くの選択肢の内のひとつではなく、それしか選ぶことの出来ない、展望のない働き方として、多くの若者の前に現れています。

日本労協連の菅野理事長から勧められて『ぼくと会社と“にっぽん再生”変質する企業社会 戸惑う現場』(日本経済新聞社)を読みました。日経産業新聞での連載をベースに、「フリーター漂流」と同じく、変

貌する日本の会社の現場を丁寧に取材した内容です。特に第1部では、請負会社の成長と正社員なき景気回復の実態について、ずさんな労務管理や安全対策、フリーターに仕事を奪われまいと必死に働く外国人労働者の姿などが描かれています。「あとがき」では連載時に「経済紙がどうしてこんなにネガティブな話題を取り上げるのか」との声が寄せられた、と紹介していますが、見せかけの景気回復、失業率低下の下で、まさに「希望格差社会」(山田昌弘)が進行していることをまざまざと見せ付けられます。飛躍のようですが、ここから戦争まではもうそんなに距離がない、そんな気がしています。協同労働という選択肢を広げるために、この一年も取り組んで生きたいと思います。

研究所の事務局スタッフを募集中です。
詳しいことは菊地までお問い合わせください。

菊地 謙